

ポータブルMP3プレーヤーを利用した、簡易LLシステムの実験

国際センター 准教授 池田 英喜

はじめに

語彙力、文法力、作文力、聴解力にはまず問題がないのに、周囲からその日本語力について、意外に低い評価しか受けられない留学生をよく見かける。彼らの多くは発話時の日本語の「音」に問題があり、実際にインタビューをしてみると、例外なく、いわゆる訛りの強い日本語で話していることがわかる。ここで言う「音」は単に単独の音の発音を指すのではなく、単語のアクセントや文全体のイントネーションも含まれる。また「訛り」も日本語としての地方訛りではなく、母語である外国語の影響によるものを指す。

そこで、この「音」に起因する留学生の日本語力過小評価の問題を解決するために、彼らの日本語の音を改善する方法のポイントとして、以下の3点の実施を考えた。

- ①サンプルとなる日本語らしい音の日本語をできるだけ何度も繰り返し聞くこと。
- ②日本語発話時の自分の音声的特長を、自分で聞いて把握すること。
- ③他者と自分の音声的特長の違いを把握し、発話時に常にその事実を意識化すること。

以上のポイントを実現するためには、教室内での週に一回程度の音声指導では不十分で、教室外での学生個人によるトレーニングが必要となる。それには機動性の高い小型の音声再生装置が必要不可欠であり、個人で音楽を楽しむために利用されている小型の携帯用MP3プレーヤーが流用できると考えた。これが、本プロジェクト経費申請の動機である。

MP3プレーヤーの利用意義

音を出す練習（発話）は、基本的には筋肉の使い方のトレーニングである。つまり、一般のスポーツトレーニングと同様、トレーニング時のトレーニング部位の意識化が重要である。自分は今どの音の発話に問題があるのか、指導時にどういった点を指摘されたのかを意識化することである。ただこれには、日常的な日本語によるコミュニケーションの場での意識化を促す必要がある。当然のことながら、言語の発話はスポーツのように特別な時間（例えば試合など）に特別な力を出すのが目的ではないからである。手のひらに入ってしまうほど小型でありながら、音質の高いMP3プレーヤーの利用は、それには最適である。

教室での実践

Gコード科目として留学生基本科目で展開している日本語E（日本語音声トレーニング）において、平成18年度第2学期と平成19年度第2学期に各15回にわたって、MP3プレーヤーを利用して指導を行なった。その際、以下の3点に特に注目して指導を行った。

- A)「どこで音を上げ、どこで下げるか」という高低（ピッチ）のコントロール
- B)「どの音を伸ばし、どの音を短く言うか」という長短のコントロール
- C)「どの音をはっきり言って、どの音を適にごまかすか」という音の明瞭さのコントロール

指導点の詳細は別稿に譲るが、指導できる期間が短いので、完全な日本語音での発話よりも、如何に日本語母語話者の耳をごまかせるレベルでの日本語音を発話できるかに的を絞って指導を行なった。

利用手順

- ①音読課題（音声ファイル・文字ファイル）を配布する。国際センターサーバー内に授業専用のスペースを設け、そこにファイルを保管し、学生が学内PC端末からアクセスしてダウンロードするという方法を取った。
- ②ダウンロード後、各自自宅その他で音読練習をし、PCで録音し、音声ファイル（MP3ファイル）をメールで担当教員に送信する。
- ③授業時間を使って、同じテキストを再度音読させ録音し、課題としてメールで送ってきたものとクラス内で聞き比べさせ、上記3点（A）-（C）を踏まえての音声的相違点の発見を促す。
- ④最初に配布したモデルの音声ファイルと再度聞き比べ、さらに音声的相違点を探させる。
- ⑤次回の課題を配布する。基本的にこの流れを繰り返す。

MP3プレーヤー利用の良い点

- ①マイクさえあれば、Windows-PCに付いているサウンドレコーダーというソフトで、簡単に自分の声を録音できる。そして、それをMP3プレーヤーに保存し、自分の声を持ち歩いて聞いて、その音声的特長を客観的に観察することがで

きる。

- ②学生の音声ファイルの聞きたい（必要な）部分をPC上ですぐに再生できる。また、同じ箇所を何度も簡単に繰り返して聞くことができる。
- ③ファイル（音声・文字とも）のサイズが小さいので、メールで簡単にやり取りができる。
- ④MP3プレーヤー自体が普及している。

MP3プレーヤー利用の問題点とその改善可能性

- ①学生個々の持っている小型音楽プレーヤーの機種によって、再生できるファイルとそうでないものが時々ある。
 - Windowsのサウンドレコーダーで録音されたものはwma形式のファイルで保存され、プレーヤーによってはMP3のみしか再生されない場合があるので、授業の中でやり取りする際のファイル形式を厳密に規定しなければならない。ただ、それさえ徹底すれば、問題回避は可能である。問題回避以前の問題として、「PC等で扱えるファイル形式にはさまざまなものがある」という、コンピューター利用者にとって基本的な知識が、学生側に備わっていることが必要となり、この点は今後のコンピューターリテラシー教育の課題とも言える。
- ②小型音楽プレーヤーを持っていない学生にMP3プレーヤーを貸し出す必要がある。
 - 今回はプロジェクト経費で18台を購入できたので、保証金と引き換えに貸し出すという方式を採用することができた。しかし、これは保証金管理等も含めて、必ずしも良い方法とは言えない。大学生協や企業等に協力を仰いで、学内での言語教育専用MP3プレーヤーというのを開発するのも一案かもしれない。その際には、入学時オリエンテーション情報等もメモリーに入れて販売すれば、ペーパーレス化も図れる。
- ③授業で日本語の音の特徴をつかむために、いろいろな形の日本語の音楽を聞かせるが、著作権法上の問題から、それらを学生に配布することができない。営利目的ではないので配布を仮に許されたとしても、サーバーに音源ファイルを置き、学生が自由にダウンロードできるという形にはできない。
 - 今回は、音楽を利用する際には教室内でのCD再生のみにとどめた。本当なら、学生に音楽ファイルをコピーし、それを聞いて練習をさせたいところだが、著作権法上不可能だろう。音楽利用は非常に有効な手段だけに、非常に残念である。

- ④学生が各自で録音してくる音声ファイルは不明瞭で、授業では使い物にならない場合が多い。

■録音したものを送信させることで、意識化の徹底（つまりはサボらないこと）を学生に課すつもりだったのだが、録音状態が学生によりあまりにも違うので、結局18年度途中で“自宅で録音＞メールで送付”という方法を止め、週一回の授業の際に教室で教員の持つレコーダーに録音してフィードバックする方式のみに変更した。最初にも書いたとおり、自分と日本語母語話者の音の違いを常に学生に意識させるにはどうすべきか、今後の課題である。

おわりに

LLでの実践とMP3プレーヤーを使った今回のケースを厳密に比較して実証したわけではないが、授業に参加したかなりの学生に日本語音の実質的改善が見られた。特に顕著に見られたのは、イントネーションと音の長さの改善であった。この2点はこれまでは発音の陰に隠れて、放置されてきた感のあるところだけに、MP3プレーヤー利用による音声指導で改善されたことは、今後の指導の方向性を示してくれたものと少し自負している。今回の実験で、特別な設備を整えなくても音声指導は十分可能であることが示せたと思う。ただ、それには指導する側も指導される側も、コンピューターとソフトウェア、またその周辺機器、をもっと使いこなせるようになる必要があることも実感させられた。ファイルの形式が少し違うだけで、せっかく録音してきた学生の音の再生ができないということを経験したので、そのたびにお互いの貴重な時間がどんどん無駄に消費されていく感じがしたこと、そしてそれは残念ながら一度や二度ではなかったことをここに記しておく。「やっぱり、テープレコーダーは単純で使いやすいナァ」と言いたいところだが、MP3ファイルの再生は、今は一部携帯電話でも可能な時代なので、大学ではそういった時代に追いつき、時には先取りするような授業展開を見せていくことも別の意味で大事なことだと感じた。

授業配布資料

サンプルテキスト

第1回

00:10-00:23

とうけいというと あじもそっけもないすうじをおもいうかべるひとが すくなくないようですが、じつは なかには ころがなごむような、ほのぼのとしたとうけいもあるのです

第2回

00:25-00:31

きしょうちょうがおこなっている、せいぶつきせつかんそくのけっかをまとめたとうけいがそれです。

第3回

00:32-00:42

このかんそくのもくてきは、せいぶつときしょうのかんけいをちょうさすることによって、そうごうてきなきしょうのうごきはあくすることです。

第4回

00:43-01:03

また、このかんそくけっかをもとはっぴょうされるうめのかいかよそう、さくらせんせんなどのことばは、わたしたちにあたらしいきせつのおとずれをつけるとともに、げんだいせいかつでは、わすれられがちな、しきのうつりかわりをおもいださせてくれます。

第5回

01:04-01:17

そしてこれらのとうけいをみると、ながいにほんれっとうを、みなみからきたへ、きたからみなみへ、きせつがゆっくりとうつていくようすがわかります。

第6回

01:18-01:33

たとえば、へいねんのうめのかいかびひとつとっても、かごしまでいちがつにじゅうろくにち、さっぽろでごがつむいか、さんかげつじょうものずれがあるのです。

第7回

00:06

日本人は昔から鯨と親しんできた。また、鯨は食物として貴重な蛋白源だった。だから、鯨を食べることは、日本人の文化であり、これを守るべきだという意見が日本にはある。

第8回

00:26

一方、イギリス人やアメリカ人なども鯨の油を得るために、18世紀から鯨を捕っていたが、鯨を食べる習慣はない。そのため彼らは「日本人は知能の発達した動物を食べる民族」と非難している。

第9回

00:46

捕鯨に反対する人たちは、鯨は哺乳類だから、魚類と分けて考えるべきだと主張する。一度に一頭か二頭

しか子供を産まない哺乳類を、一度に何千、何万という卵を産む魚類と一緒ににはできないというのだ。

第10回

01:07

また、この考え方の裏には、鯨は神が作った神聖な生き物であるといった宗教上の理由もあるようだ。

第11回

01:17

これに対して、捕鯨を進めようとする人たちは、生物資源は、基本的に魚も鯨も同じで、利用できるものは利用すべきだという。そしてIWCの決定は、「科学的ではない」「ある特定の種だけを神聖な生物だとするのはおかしい」と反対している。

第12回

01:45

このように、捕鯨の問題は、さまざまな国民の感情や国際問題が絡んでおり、どの国の意見が正しいとは、簡単には言えない。

出典

土岐哲他「CD 日本語中級 J301-基礎から中級へ」スリーエーネットワーク

第1回-第6回は第4課「ながーい日本列島-南北でこんなに違う梅の開花日-」より、第7回-第12回は第8課「鯨と日本人」より
注・時間はファイル上の時間を表す。

購入し利用したMP3プレーヤー

